

談話のトピック展開から見た「ほめ」

永田 良太

1. 研究の目的

「ほめ」は相手のポジティブ・フェイスを満たす発話行為であり(古川2007)、円滑な人間関係を築く上で重要な役割を果たす。「ほめ」に関しては、その対象や表現形式など、これまでに多くの研究がなされてきた。熊取谷(1989)では、才能、知識、技術、容姿、服装、所持品、努力、性格などが「ほめ」の対象となることが指摘されている。また、「ほめ」は会話の参加者だけでなく、共通の知人や有名人といった第三者に向けられることも明らかにされている(古川2000)。さらに、「ほめ」に用いられる表現として、大野(2003)では、評価語、感情表明、羨望表明、などが挙げられている。

「ほめ」に関する従来の研究においては、上記のような「ほめ」表現それ自体に関する研究に加えて、「ほめ」に至るまでの展開(熊取谷1989)や「ほめ」に対する応答(寺尾1996、平田1999、大野2004)など、分析対象が拡大されてきた。これらの研究において、日本語の「ほめ」の諸側面が明らかにされてきたが、それらは個別の「ほめ」表現およびそれを中心とする局所的な分析であると言える。

三牧(2008)は、ポライトネスをディスコースレベルで捉える必要性を説く宇佐美(2001)をふまえ、会話中では参加

者によるFTA(Face Threatening Act)バランス探求行動が見られることを指摘している。これは会話の中で参加者のフェイスが脅かされた場合に、くずれたバランスを整えようとする働きが見られるというものであり、三牧(2008)では「からかい」によって相手のフェイスを侵害した話者が、自らのフェイスを脅かすような発話を自発的に行うことで、フェイスのバランスを保とうとする例が挙げられている。

本研究で扱う「ほめ」は相手のフェイスを満たすものであるが、それが行われることにより、相互のフェイスバランスに不均衡な状態が生じるという点では上記の問題と共通すると言えよう。本研究では、このような問題意識のもと、これまで個別に捉えられてきた「ほめ」について、他の「ほめ」との関係に着目し、談話の中で観察することにより、「ほめ合い」や「ほめの交替」というフェイスのバランスを保つための相互行為が行われていることおよびそれらはトピックの展開と密接に関わることを明らかにする。

2. 分析資料と分析対象

本研究で分析する談話は大学院生同士による10組の自由談話である。参加者は22歳から24歳の大学院生20名であり、面識のない同学年の相手とそれぞれ20

分程度個室で会話してもらったものである。会話はテープレコーダーに録音された。本研究では、それを文字化したものを分析資料とする。

分析対象に関して、先に挙げた大野(2003)にもとづいて「ほめ」表現を分析資料から抽出した。「ほめ」の認定に際しては、他の認定者(日本語母語話者40歳女性)にも同様の作業を行ってもらい、二人の判断が一致したものを本研究では分析対象とする。

なお、「ほめ」の認定作業を行った結果、9組の談話においては談話中に複数の「ほめ」が観察されたが、「ほめ」が1例しか観察されなかった談話も1組見られた。本研究では談話中の「ほめ」と「ほめ」との関係に着目して分析を行うため、談話中に複数の「ほめ」が見られた9組の談話について分析を行う。

3. 分析と考察

3.1 談話のトピックと「ほめ」の現れ方

先に述べたように、「ほめ」は才能や容姿といった相手の事がらに加えて、共通の知人や有名人といった第三者に関する事がらに対しても行われる。このような指摘をふまえ、本研究では、談話における「ほめ」の現れ方を分析するに際して、談話中で何が話題とされているか、すなわち談話のトピック¹⁾との関わりから分析を行う。

村上・熊取谷(1995)によれば、談話におけるトピックは構造をなしており、複数の小トピックが集まることで大トピックが構成されるという。談話においては、そのようにトピックが互いに関わり合いながら推移するというトピック展

開が見られるが、トピックとトピックとの切れ目には様々な言語的表示が見られる。

村上・熊取谷(1995)によれば、先行トピックの終結部には、まとめや評価をする表現およびそれらを導く「まあ」「じゃあ」などの談話標識が見られるという。一方、後続トピックの開始部には「そう言えば」「あ」といった認識の変化を示すことばや「月曜日ね」「〇〇さんて」などの後続トピックのフレームの提示が見られることが指摘されている。また、杉戸・沢木(1979)によれば、一つのトピックを構成する語彙には意味的連関性が認められるという。本研究では、これらの言語的表示を手掛かりに、談話資料におけるトピックの認定を行った。なお、トピックの認定に際しては、筆者以外の認定者2名²⁾にトピックの認定を依頼し、不一致の箇所に関しては認定者間で協議を行った。本研究では、筆者を含めた認定者3名中、2名の判断が一致したものを一つのトピックとして扱う。

各トピックにおける「ほめ」の現れ方を談話別にまとめたものが次の表1-1～表1-9である³⁾。表中の丸数字は、それぞれの談話で見られた「ほめ」を時系列に表したものであり、右端の「合計」欄は各参加者に見られた「ほめ」の数と割合を表したものである。

なお、本談話資料中に見られたトピックは、後述するように「参加者に関わるもの」と「参加者に関わらないもの」に大別されるが、以後の分析のために、「参加者に関わるトピック」にはトピック番号に網掛けを施してある。また、トピック間の太線は上記の認定方法によって確認

表1-1 トピック展開時に見られた「ほめ」＜談話1＞

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	合計
A					③		⑤	⑥⑦				⑬		⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕	㉗	15(51.7%)
B			①②				④			⑧⑨⑩⑪	⑫		⑭⑮⑯		㉖㉗㉘	14(48.3%)

表1-2 トピック展開時に見られた「ほめ」＜談話2＞

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	合計
C				①②③④⑤⑥							⑩		7(63.6%)
D										⑦⑧⑨		⑪	4(36.4%)

表1-3 トピック展開時に見られた「ほめ」＜談話3＞

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	合計
E						②④			⑤	⑦⑨					⑭⑮⑯	8(50%)
F						①③			⑥	⑧				⑩⑪⑫⑬		8(50%)

表1-4 トピック展開時に見られた「ほめ」＜談話4＞

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	合計
G					②		⑤⑥⑦	⑧⑩⑫			⑮⑯	⑲			㉑	11(52.4%)
H				①		③④		⑨⑪	⑬⑭⑮			⑱⑲				10(47.6%)

表1-5 トピック展開時に見られた「ほめ」＜談話5＞

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	合計
I		①				④	⑤					3(60%)
J			②			③						2(40%)

表1-6 トピック展開時に見られた「ほめ」＜談話6＞

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合計
K					①④⑤				⑩⑪	5(41.7%)
L					②③⑥⑦⑧⑨				⑫	7(58.3%)

表1-7 トピック展開時に見られた「ほめ」＜談話7＞

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	合計
M								②		④⑤⑨⑩⑬	⑭⑮⑯	㉑	㉒㉓㉔	13(52%)
N							①			③⑥⑦⑧⑪⑫	⑮⑯	⑲	㉑㉒	12(48%)

表1-8 トピック展開時に見られた「ほめ」＜談話8＞

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	合計
O					②			⑤							⑦⑧				4(36.4%)
P				①		③		④							⑥			⑨⑩⑪	7(63.6%)

表1-9 トピック展開時に見られた「ほめ」＜談話9＞

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	合計
Q					②			③④				⑨				⑭⑮		⑲⑲		8(40%)
R				①						⑤⑥	⑦		⑧		⑩⑪⑫⑬	⑮⑯⑰				12(60%)

されたトピックのまとめ(大トピック)を表す。

表1-1～表1-9の右端の合計欄を見ると、いずれの談話においても各参加者にほぼ同じ割合で「ほめ」が行われていることが分かる。では、そこにおける「ほめ」の現れ方にはどのような特徴があるのだろうか。以下においてはまず、トピック番号が付されたそれぞれのトピック内における「ほめ」の現れ方について、トピックの内容に着目して分析を行う。その後、連続するトピックにおける「ほめ」の現れ方について、相互行為という観点から分析を行う。

3.2 トピック内における「ほめ」の現れ方

3.2.1 トピックの種類

先に述べたように、本談話資料中に見られたトピックは「参加者に関わるもの」と「参加者に関わらないもの」に大別される。前者は「所属」「研究テーマ」「就職活動」「留学体験」「アルバイト」など参加者自身に関わるトピックである。それに対して後者は「調査の目的(『これ、何の調査だろう?』)」「共通の知人」「大学の教員」「芸能人」「野球選手」など、参加者自身に直接関わらないトピックであり、そこで見られる「ほめ」は古川(2000)で指摘される「第三者ほめ」に相当する。

このようなトピックの性質の違いに着目して表1-1～表1-9を見ると、「ほめ」の現れ方には違いがあることが分かる。以下に、それぞれのトピックにおける「ほめ」の現れ方について見る。

3.2.2 「参加者に関わるトピック」における「ほめ」の現れ方

表1-1～表1-9を見ると、「参加者に関わるトピック(網掛け部分)」の場合には、当該のトピック内でどちらか一方の参加者によって「ほめ」が行われることが多いのに対して、「参加者に関わらないトピック(網掛けなし)」の場合には、当該トピック内で双方の参加者による「ほめ」が見られることが多いことが分かる。以下にそれぞれの例を示す。

まず、「参加者に関わるトピック」においては次のような「ほめ」が見られる⁴⁾。

例(1)

- 1 A: 間に合わんって言いながら(修士論文を)やったりとかして
- 2 B: へーなるほど
- 3 A: ですね、うん
- 4 B: あ、いや、卒業されたら先生なんですか?
- 5 A: そうなんですよ。一応ですね、なんか、2月1日からなんですけど
- 6 B: あー、すごい
- 7 A: あの、〇〇町っていうのがあるんですけど
- 8 B: あ、そうですか、うん
- 9 A: あの辺に私立の高校があって、あの、産休の先生が[はいはいはいはい]いらっしゃってその代わりに
- 10 B: あ、もう行ってらっしゃるんですか?
- 11 A: はい
- 12 B: すごーい
- 13 A: 今日も
- 14 B: 本当に? あ、お疲れ様です。

(談話1: トピック番号2→3)

例(1)においては「修士論文」に関するトピックから「あ、いや、卒業されたら先生なんですか？」(発話番号4)というBの発話によって「大学院修了後のAの進路」についてのトピックに移行している。先行トピックの終結部には「へーなるほど(発話番号2)」といったそれまでの情報に対する理解を表す発話や「ですね、うん(発話番号3)」といったそれまでの自らの発話を繰り返すような発話が見られ、当該のトピックについて十分な情報が得られ、それ以上発展させる必要性がないことが両者に確認されている。また、後続トピックの開始部には村上・熊取谷(1995)で指摘される「あ」といった認識の変化を表す表現(発話番号4)が見られることやそれ以後のAの発話に「勤務地」や「勤務先」に関する語彙が見られることから、発話番号3と発話番号4の間でトピックが転換していると考えられる。

そのような「Aの進路」に関するトピックが展開される中で、発話番号6や発話番号12のような「ほめ」がBによって行われている。これらの「ほめ」においては、いずれも「相手の状況」に対して「すごい」という評価語が用いられるとともに長音化というパラ言語によってそれが強調されている。

9談話中、「参加者に関わるトピック」において「ほめ」が見られたものは38トピックであり、そのうちの36トピック(94.7%)において、例(1)のように、どちらか一方の参加者による「ほめ」が見られた⁵⁾。熊取谷(1989)で指摘されるように、相手の様々な側面が「ほめ」の対象になることを考えると、このような「ほめ」が談話中に多く見られることはうな

ずけるが、ここでそのようなトピックがどのように談話中に導入されるかという点に注目してみたい。

例(1)では発話番号6と発話番号12において、Bによる「ほめ」が行われているが、そのような「ほめ」が行われるトピックは「卒業されたら先生なんですか？」(発話番号4)というB自身の発話によって談話の中に導入されている。すなわち、例(1)において「ほめ」の対象はB自身によって談話中に導入されているということである。このような視点で見ると、「ほめ」が見られた38の「参加者に関わるトピック」のうち、28のトピック(73.7%)が、例(1)のように「ほめ」の発話者自身によって談話中に導入されていた。

上記のように、「参加者に関わるトピック」においては、当該のトピックを談話中に導入した参加者によって「ほめ」が行われることが多い。このようなトピックの導入と「ほめ」との関わりについては3.3.1節において改めて考察を行う。

3.2.3 「参加者に関わらないトピック」における「ほめ」の現れ方

「参加者に関わらないトピック」に関して、本談話資料中には例(2)のような「ほめ」が見られた。例(2)はプロ野球の試合が行われる際に、Mのアルバイト先であるホテルが宿泊先になっており、X選手が宿泊した際の様子について話されているものである。

以下の例では、Mの話を受けて、Nが「偉い」という評価語を用いて「X選手の行動」に対する「ほめ」を行っているが(発話番号6)、それを受けたMも同様の評価語を用いてX選手に対する「ほめ」を行っ

ている（発話番号7）。その後も「偉い」という同様の評価語を用いた「ほめ」（発話番号8、9）や「すごい」という評価語がパラ言語によって強調された「ほめ」（発話番号12）が続いており、同じ対象に対して参加者双方が「ほめ」を行うという「ほめ合い」が見られる。

例(2)

- 1 M：従業員なんかよく、搬入で入ってくるトラック[うんうん]の、その、スペースがあって
- 2 N：うんうん
- 3 M：そこに野球のシーズンになったらネットはって、その、その選手が、こう[あー]素振りとか出来るようにしてるから
- 4 N：へー
- 5 M：だから〇〇（球団名）とかが来たときは、X（選手名）はいつも素振りしてた
- 6 N：やっぱX偉いなー
- 7 M：Xは偉いよ
- 8 N：やっぱその辺が偉いなー
- 9 M：偉いよね、やっぱ実力ある人はこういうところでも練習するんよね、その、だいたいバイトが4時間ぐらいで、その会場に行く時に通った時も素振りしてて
- 10 N：うん
- 11 M：で、ま、下りてきてもまだ素振りしてたからね
- 12 N：すげーな一、X
（談話7：トピック番号10）

「参加者に関わらないトピック」で「ほめ」が見られたものは18トピックである

が、そのうちの15トピック（83.3%）において、例（2）のように、参加者双方による「ほめ合い」が見られた。このような「ほめ合い」では、相手が肯定的な評価を下した対象に対して自らも肯定的な評価を下すことで、互いの価値観を承認し、共通性を確認するということが行われていると考えられる。

以上、トピックの種類によって、「ほめ」の現れ方には違いがあることを見てきたが、一方の参加者による「ほめ」が行われるか双方の参加者による「ほめ合い」が見られるかによって、その後のトピック展開も異なる。ここで、表1-1～表1-9において、太線で記されたトピックのまともりに着目すると、一方の参加者による「ほめ」が見られたトピックの直後に大トピックの区切り（表中の太線）が見られたものは35トピック中10トピック（28.6%）であった。他方、双方の参加者による「ほめ合い」が見られたトピックの直後に大トピックの区切りが見られたものは14トピック中1トピック（7.1%）であった^{6）}。ここから、互いに肯定的な評価が下された場合には、それに関連するトピックがその後も展開されやすいということが分かる。すなわち、トピック内における「ほめ合い」は、その後どのようなトピックが展開されるべきかを参加者が互いに認識するというトピック展開上の役割を担っていると考えられる。

3.3 連続するトピックにおける「ほめ」の現れ方

3.3.1 「ほめ」の連続と交替

これまでは、それぞれのトピック内に見られる「ほめ」に着目して分析してき

たが、以下においては、連続するトピックに見られる「ほめ」に着目して分析を行う。表1-1～表1-9における「ほめ」の現れ方を見ると、連続するトピックで「ほめ」が見られやすいことが分かる。そして、そこでは「ほめ」が交互に行われている。例えば、談話1(表1-1)においてはトピック6でAによる「ほめ」が行われているが、その後のトピック7ではBによる「ほめ」が見られ、さらにトピック8では再びAによって「ほめ」が行われている。

本談話資料においては、9談話中、53のトピックにおいて「ほめ」が見られたが、そのうち19の「参加者に関わるトピック」で、先に示した談話1のトピック6～8のように、どちらか一方の参加者によって相手に対する「ほめ」が行われた直後のトピックで他方の参加者による「ほめ」が行われるという「ほめの交替」が見られた。先に述べたように、談話中の「ほめ」は各参加者にほぼ同じ割合で行われているが、それらの出現順序に関しても、談話中でバランスがとられていることがここから分かる。

また、「参加者に関わるトピック」においては、「ほめ」の発話者自身によって当該のトピックが導入される傾向があることを3.2.2節で見たが、「ほめの交替」が見られた19の「参加者に関わるトピック」においては、16のトピック(84.2%)で「ほめ」を行う参加者自身によって後続トピックが導入されており、特にその傾向が強い。以下に例を示す。

例(3)

1 R: あ、高校があ、英、英語をた

くさんするようなクラスだったんですよ[え]毎日

2 Q: いいなー

3 R: で、あ、カナダに行けるんですよ、そこの学、学科に[あー]入れば、一週、えっと、一ヶ月、カナダでホームステイをして

4 Q: すごいじゃないですか

5 R: ていう高校で

《中略》

6 R: 行ったことあるんですか? あのイギリスでしたっけ? ありますよね

7 Q: あー

8 R: 留学するやつ、行ってなかったんです?

9 Q: あ、私、今度行くんですよ

10 R: あ、そうなん、どこに行くんですか?

11 Q: 今度、ニュージーランド行くんですよ

12 R: あ、もしかして

13 Q: はい、なんか聞いたことあります?

14 R: えーと、どこだっけ、〇〇(大学名)

15 Q: あ、はい、そうです

16 R: Y(著名な研究者)がいるところ

17 Q: あ、そうですそうです

18 R: なんかに聞いたことがある、いいな、Yがいるんだ

19 Q: いやー

20 R: うらやましい

(談話9: トピック9→10)

例(3)では、「Rの高校における留学プログラム」に対して「いいなー」というパラ言語を伴った羨望表明による「ほめ」

(発話番号2) および「すごい」という評価語による「ほめ」(発話番号4) がQによって行われている。その後もRの高校時代の留学に関するトピックは続いているが、発話番号6のRの発話によって、「Qの留学」についてのトピックに移行している。「留学」という先行トピックから派生したトピック⁷⁾への移行であるため、例(1)で見られたような言語的表示は見られないが、Qの留学先であるニュージーランドおよび留学先の大学に関する語彙によってトピックが構成されていることから、トピックが移行していることが分かる。そのようにRによって導入された「Qの留学先」に対して「いいなー」や「うらやましい」といった羨望表明による「ほめ」(発話番号18,20)がRによって行われている。

このように、ほめられた側が、相手に関して「ほめ」の対象となりうるトピックを自ら導入し、そのトピック内でほめ返すという「ほめ」の相互行為が成立している。

3.3.2「ほめ」の回数

連続するトピック間で「ほめの交替」が見られることを上に見たが、そのように「ほめの交替」が見られる際の「ほめの回数」に着目すると、先行トピックと後続トピックでバランスがとられていることが分かる。

例えば、先に挙げた例(3)では、先行トピックにおいて参加者Qによる複数の「ほめ」(発話番号2,4)が見られるが、後続トピックにおいてはRによる複数の「ほめ」(発話番号18,20)が見られる。「ほめの交替」が見られた19の「参加者に関

わるトピック」のうち、先行トピックにおいて複数の「ほめ」が見られたものは7トピックであったが、その内の6トピックにおいて、後続トピックでも複数の「ほめ」が見られた。

一方、談話1(表1-1)のトピック6とトピック7、およびトピック7とトピック8のように、先行トピックにおいて「ほめ」が単独で見られた場合には、後続トピックにおいても単独の「ほめ」が見られた。「ほめの交替」が見られた19の「参加者に関わるトピック」のうち、先行トピックにおいて単独の「ほめ」が見られたものは12トピックであったが、そのうちの10トピックにおいて、後続トピックでも単独の「ほめ」が見られた。

このように、「ほめの交替」が見られる際に、単独の「ほめ」に対しては単独の「ほめ」で応じ、複数の「ほめ」に対しては複数の「ほめ」で応じるというバランスがとられていることが分かる。

4. まとめ

本研究においては、「ほめ」が談話の中でどのように行われているかについて、トピックの性質との関わりおよび連続するトピックにおける「ほめ」の現れ方について分析を行った。本研究で明らかになったことは以下の3点である。

- ①参加者に関わるトピック内ではどちらか一方の参加者によって「ほめ」が行われることが多いのに対して、参加者に関わらないトピック内では双方の参加者による「ほめ合い」が行われることが多い。
- ②先行トピックでどちらか一方の参加者

によって「ほめ」が行われた場合には後続トピックで他方の参加者が「ほめ」を行うという「ほめの交替」が見られる。

- ③「ほめの交替」が見られる場合、先行トピックで単独の「ほめ」が見られた場合には後続トピックにおいても単独の「ほめ」が見られることが多い。一方、先行トピックで複数の「ほめ」が見られた場合には後続トピックにおいても複数の「ほめ」が見られることが多い。

古川 (2007) で指摘されるように、「ほめ」は相手のポジティブ・フェイスを満たす行為であるが、本研究で明らかになったように、初対面の参加者同士の談話では、自らのポジティブ・フェイスが一方的に満たされることによって生じる相互のフェイスの不均衡な状態を、その後の談話展開の中で解消し、バランスを保とうとするような相互の働きかけが観察される。また、参加者自身のフェイスには直接関わらない事柄に対する「ほめ (第三者ほめ)」が一つのトピック内で相互に行われることで、互いの価値観を承認し、その共通性を確認するということが行われていると考えられる。

「ほめ」とトピックとの関係について、本研究で明らかになったように、会話の参加者はトピックが展開する際、トピックの性質に応じて「ほめ」を使い分けている。また、「ほめ」を生起させるためのトピックを自ら会話中に導入することもある。さらに、トピック内で生起する「ほめ合い」はその後どのようなトピックが展開されるのが望ましいかを参加者が互いに共有するというトピック展開上の役

割を担っていると思われる。

従来、「ほめ」に関しては個別の「ほめ」表現およびそれを中心とする局所的な分析が行われてきたが、本研究で明らかになったように、「ほめ」は談話中の他の「ほめ」やトピック展開と密接に関わる。今後はこのような広い視点で「ほめ」を捉えていく必要があると考えられる。

ただし、本研究においては初対面の参加者同士の談話を分析したが、談話中の「ほめ」の見られ方は参加者同士の関係によって異なる可能性がある。本研究の分析に加えて、他の種類の談話をさらに分析し、談話における「ほめ」の実態を明らかにする必要があるが、この点については今後の課題としたい。

注

- 1) 本研究では、分析の枠組みである村上・熊取谷 (1995) に従い、「トピック」を「会話の対象となっている事柄」と捉える。これは南 (1981) の「話題」に相当するものであるとされる。
- 2) 筆者以外の認定者2名は36歳女性と38歳男性であり、いずれも日本語母語話者である。
- 3) 各談話の始まりや終わりには、挨拶等が行われる「開始部」や「終結部」が見られたが、これらの部分に関しては、トピックが具体的に展開されるその他の部分とは性質が異なることや「ほめ」も見られなかったことから、表中から省いてある。
- 4) 談話の表記に関して、「？」は疑問のイントネーションを表し、[] は発話と同時に生起したことを表す。なお、() 内の語は便宜上、筆者が意味を補った

ものである。

- 5) 38トピック中、2トピックにおいては、一方の参加者が「ほめ」を行った直後にもう一方の参加者が「ほめ」を行っており、一つのトピック内に双方による「ほめ」が見られた。
- 6) 各談話の最後のトピックに関しては、「時間の制約」という外的事情がトピックの終結に関わる可能性が考えられるため、ここでは除外してある。
- 7) 村上・熊取谷(1995)では、先行トピックで言及された事象が後続するトピックとなるような展開の型を「派生型」と呼ばれる。

参考文献

- 宇佐美まゆみ(2001)「談話のポライトネス—ポライトネスの談話理論構想—」『第7回国立国語研究所国際シンポジウム第4専門部会 談話のポライトネス』pp.9-58、国立国語研究所。
- 大野敬代(2003)「人間関係からみた「ほめ」とその工夫について—シナリオにおける「働きかけ表現」として—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』(10)-2、pp.337-346、早稲田大学大学院教育学研究科。
- 大野敬代(2004)「待遇からみた「ほめ」の応答とその工夫—シナリオ談話における politeness ストラテジーとしての分析から—」『早稲田大学教育学部学術研究(国語・国文学編)』(52)、pp.27-39、早稲田大学教育会。
- 熊取谷哲夫(1989)「日本語における誉めの表現形式と談話構造」『言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究』(2)、pp.97-108、広島大学教育学部日

本語教育学科。

- 杉戸清樹・沢木幹栄(1979)「言語行動の記述—買い物行動における話しことばの諸側面—」『言語と行動』南不二男(編)、pp.271-319、大修館書店。
- 寺尾留美(1996)「ほめ言葉への返答スタイル」『日本語学』15(5)、pp.81-88、明治書院。
- 平田真美(1999)「ほめ言葉への返答」『横浜国立大学留学生センター紀要』6、pp.38-47、横浜国立大学。
- 古川由里子(2000)「「ほめ」の条件に関する一考察」『日本語・日本文化研究』10、pp.117-130、大阪外国語大学日本語講座。
- 古川由理子(2007)「「ほめ」の返答とポジティブ・フェイス—日本語教育への応用を目指して—」『間谷論集』(1)、pp.99-114、日本語日本文化教育研究会。
- 南不二男(1981)「日常会話の話題の推移：松江テキストを資料として」『藤原与一先生古希記念論文集方言学論叢 I』藤原与一先生古希御健寿祝賀論集刊行委員会編、pp.87-112、三省堂。
- 三牧陽子(2008)「会話参加者による FTA バランス探求行動」『社会言語科学』11(1)、pp.125-138、社会言語科学会。
- 村上恵・熊取谷哲夫(1995)「談話トピックの結束性と展開構造」『表現研究』(62)、pp.101-111、表現学会。
- (広島大学)